表 1　電子メールと対面コミュニケーションの相違点

	メール（CMC）	対面
時間	制限されない	会わないとできない
場所	電波があればどこでも	話すことができる場所が必要
コミュニケーション対象	アドレスを知っている人	その場にいる人
相手への言いやすさ	言葉を選ぶ	面と向かって言う怖さがある
伝わりやすさ	意味が変わってしまうかも	顔の様子がうかがえる 誤解を訂正することができる
伝えやすさ	簡単な連絡がしやすい	重要なことは対面がよい

ーションの場合は社会的・感情的な次元が欠落しやすい。しかし、相手のノンバーバルコミュニケーションだけでなく、相手の社会的地位や年齢など成員間の地位格差が意識されにくいため、参加者が等しく討議に参加しやすくなるほか、自己開示・自己表現がしやすい。その結果として、成員にとって益のあるコミュニケーションがなされることもある。

(2) フレーミング

ノンバーバルコミュニケーションのような感情面・人格面のコミュニケーション要素が欠落することで、コミュニケーションの相手の感情を評価できなかったり、あるいは相手からの自分に対する評価を考えることができなくなる傾向がある[15]。これを原因としたトラブルとして顕著なのは「フレーミング」であり、電子掲示板やメールなどでよく生じる誹謗や中傷に発展するトラブルのことをいう[16]。

(3) 脱個人化

CMC を利用したコミュニケーションでは、社会的手がかりが減少することによって、匿名性が高まる。そのため、対面コミュニケーションの場では常に前提となる地位や役割、周囲との社会関係から離れてコミュニケーションをする状況が生まれる。これをキースラーは脱個人化（de-individualization）と呼んだ。自分の日常のアイデンティティが低下することから、オンライン・ペルソナを形成することもある[12]。周囲の評価に囚われずに脱個人化すると、あたらしい「ほんものの私」を表現しやすくなるのである。

富田[17]は匿名性の高い CMC において脱個人化した場合、会ったことないコミュニケーションの相手と親密度が高まることがあることを指摘し、こうしたコミュ

ニケーションの相手をインティメイトストレンジャーと呼んだ。携帯電話のメールや SNS によるコミュニケーションのように、個人と個人を確実につなぐようなメディアでは、あたらしい「ほんものの私」に対して好意的な評価をする相手と、匿名性の高いまま直接コミュニケーションをとることが可能になる。そして、ときに対面での関係を持つ友人や恋人よりも、こうした相手を親密に感じやすくなる現象があるという。このような背景から、自我形成期の子どもたちにとっては、揺れるアイデンティティの中で、あたらしい自分のあり方や自己表現を見いだす機会を得ているばかりでなく、それが事件に巻き込まれる端緒ともなっているのではないかと考えられる。

3.4. ディスカッション

このフェーズでは、3.3.までの講義をもとにして、受講者自身のこれまでの体験や、周囲で起こった出来事と、講義内容との関連について、受講者に小グループで話し合いをしてもらった。その結果発表の中から、特徴的な内容を以下に列挙する。□の中はディスカッション後の発表で受講者が話した内容を文字起こししたものである。プライバシー保護の観点から、受講者名は伏せ字とした。

(1) 文科省通達と現場の生徒指導との乖離

文部科学省から持ち込み禁止の徹底に関する通達が出たが、現場では実質対応できていない現状が話題として示された。

> 今学校にはケータイを持ち込まないような方向でっていう国の話が出てましたよね。あれば現実には何も学校現場ではされていないというのが現状で、ほとんど普通に持ち込まれている、普通に持ってきているのが当たり前の状況になっているというのが今の現状かな、という話をしました。（略）現場でも何とかそのケータイの方の使い方等を指導していかなければいけないという意識があるんですが、実はなかなかご家庭の方で理解をしていただけないというところで、「まだ持たせるの早いですよ」とか「いろんな問題起きて、持たせるの考えたほうが良いですね」なんて話をしても、結果として保護者の方が「子どもの安全のため」という一言で、持たせてしまって、そこでトラブルが起きるというのが怖いなということを申しました。

携帯電話の所有は、子どもと連絡が取れるようにしたいという保護者の希望によるところも大きい。だからといって家庭で指導が行き届いているわけではなく、学校側も十分な指導責任を負えない問題となっていることがうかがえる。

(2) 子どもたちのコミュニケーションの変化

子どもたちのコミュニケーションの仕方が常日頃から変わってきているという指摘が、現職教員からなされた。

> あとは、そうですね、子どもはやはりケータイでコミュニケーションをすることが今メインになってきている部分があって、そうすると、さきほどの脱抑制じゃないですけれども、何も考えずに自分の思ったことをどんどんどんどん表現することができるというか、逆にそういうことでしかコミュニケーションをとれない子どもが今増えてきている、まわりとの関係づくりとか、まわりのことを何か考えて話をするというのができない子たちが非常に実は増えてきています。

しかし、教員側が子どもたちのコミュニケーションがうまくいっていないという認識を持っていたとしても、若者側からみれば、それは実はしっかり共有できている世界があるのだという議論もなされた。若者の世界観と教師の世界観の違いがディスカッションの中で顕在化し、議論の対象となったことがうかがわれる。

> **先生側から見ると、子どもたちがコミュニケーション、特にメールとかで誤解を招いたりとか、そういう、コミュニケーションのギャップ、を感じるというか、うまくできていない、コミュニケーションがうまくできていないというのをすごく感じているらしくて、でもそれに対して、子ども側に近い私たち（筆者注：学生）の方は、メールの中でも世界観をもっていて、それをうまく共有できているっていう事実もある。

3.5. 事例研究

2008 年 8 月 4 日に NHK 教育テレビジョンで放送された『「ネットいじめ」に向き合うために』（NHK エデュケーショナル制作）の第 3 話の前半部分を視聴した。このドラマでは、生徒会活動の最中の些細なトラブルからいじめが行われるようになる経緯が描かれている。後半部分では、いじめられた子どもにはどういうケアをするべきなのか、掲示板に投稿された悪意ある記事を削除することやその依頼方法、および保護者との連携が描かれている。

本講では、このドラマの前半部分のみを視聴した上で、どのようなケアや指導が当該生徒やクラスに対して必要だと考えられるのかを話し合い、発表することを課題とした。**写真** 2 は、受講生らが作成したポスターの一例である。15 名を 4 グループに分けたうえで、2～3 枚の模造紙を渡して自由に討論の結果を描画した上で、発表させた。

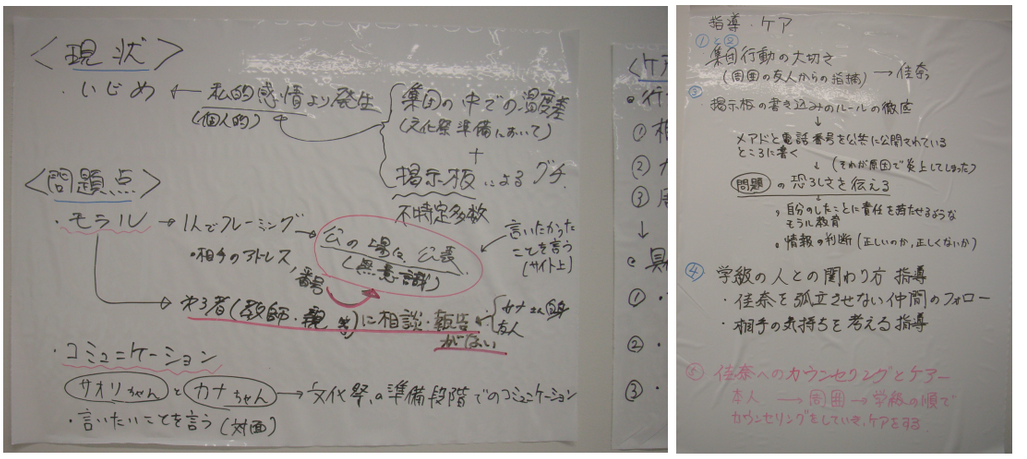

写真 2　ポスター成果物の一例

4.　リフレクションからみる学び

講習の最後に、受講者には「リフレクション」として筆記課題に取り組んでもらった。出題内容は「あなたが、この講習で学び取ったことは何なのか、また、本務で活用できそうなことは、どのようなことかを考えて、下記に記述してください」というものであった。ここでは、その回答内容から、①本講習で現職教師たちが得た学びと、②学生が参加したことによる効果について検討する。

4.1. 講習で得た学び

受講者 A、受講者 B ともに、リフレクションの中で授業内容と、現場で直面している問題とを絡めて考察をしていた。

受講者 A は、「言語」を使うことは「自分自身を周りの人たちに直接伝える＝コミュニケーション」するためのものという考えをこれまで持っていたが、「ネット・メディアを使ってのコミュニケーションを多用している」子どもたちは、直接ではなくオンラインで自分自身を周りの人たちに伝える「装置」としてそれを使っているということを認識したことを述べた。そのうえで、以下のように「文字」「文章」にすることがどのような意味があるのかということを子どもたちが認識する必要がある、という指導観に至ったことが述べられた。

結局、ネット・メディアを利用する場合、モラルをもってつかっていくことが大切であるとともに、「文字」や「文章」がどれだけそれをうける相手に影響を与えるかを認識すべきということが痛感できました。学校現場において強く伝えて行きたいと思います。(受講者 A)

受講者 B は、主に本講で提供されたメディアコミュニケーションに関する哲学的な議論をもとにして、自らが現場で子どもたちの対応を考えなければならない事態の大きさに向き合っていることがうかがわれた。

携帯メールの広がりにより、公私がゆらぎ、同室的な排他集団が広がっていること、現実感の変容、友達意識の変容、そして自己概念の変容・消失につながっていく傾向にあることを知りました。そのような中で教育現場に立つ我々は何をすべきかを具体的に考え、実践していかなければならないと感じるとともに、その困難さにかなり頭が痛いです。（受講者Ｂ）

4.2. 学生参加の効果

本講では、学生が、携帯電話やメディアコミュニケーションの指導に関する現職教員の受講者の議論に参加し、若者の視点から率直な声を交えることで、実質的な学習指導を検討するうえで有益ではないかと考えていた。リフレクションを見ると、教員とは別の視点から意見が投げかけられ、事例の検討が行われたことが分かる。

学生さん達と共に活動できたことで学校現場で起きた１つの事例について、広い見方で話し合うことができました。事件の直接原因とそれへの対応にとらわれがちな現場の見方の中で、他の要因と思われる事への対応の大切さなどにも気づかされました。（受講者Ｂ）

とくに、受講者 A の記述の中には、子どもに近い目線からの意見が学生から投げかけられ、子ども主体の対応をどのようにするべきか考えさせられたことが垣間見られた。

最後の事例研究において、現場では典型的なネットいじめの検討で、学生さんから「生徒に報告・相談したことでいじめられる」という意見があり、最近でもこのことが心配されるのかとおどろく一方、現場の先生の悪い対応をきくことができました。（受講者A）

５．　まとめ

筆者らは教員免許状更新講習として、「ネット・メディア時代の子どもとコミュニケーション」のテーマの講習を開発し、実施した。まず、主に心理学・哲学の側面から子どもとコミュニケーション、自己形成と現代のメディアコミュニケーションの発達の関係について講義を提供した。そして、それをもとに大学生とともに現場経験との関連づけと事例研究を行う中で、若者の視点を取り入れながら具体的かつ実質的な対応を考究するセッションを行うことができた。

謝辞

本講習の開発と実施には、専修大学情報科学研究所の平成 21 年度研究助成「ネット・メディア時代の子どもとコミュニケーション―教員免許更新講習のための教材開発―」の支援を受けた。また、実施にあたって学内関係者の皆様には諸事ご調整をいただいた。関係の皆様にお礼申し上げる。

参考文献

[1] 文部科学省(2008)　教員免許更新制の概要 [Online] http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/koushin/001/001.pdf（最終確認日：2011 年 2 月 5 日）

[2] 文部科学省初等中等教育局(2009) 学校における携帯電話の取扱い等について（通知）

[3] 堀田龍也（2004）メディアとのつきあい方学習―「情報」と共に生きる子どもたちのために．ジャストシステム，東京

[4] 石野純也（2008）ケータイチルドレン―子どもたちはなぜ携帯電話に没頭するのか? ソフトバンククリエイティブ，東京

[5] 藤川大介（2008）ケータイ世界の子どもたち．講談社，東京

[6] 富士通総研（2009）子どもの携帯電話等の利用に関する調査 [Online] http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/__icsFiles/afieldfile/2009/05/15/1266544_3_1.pdf（最終確認日：2011 年 2 月 5 日）

[7] 内閣府（2008）第 5 回情報化社会と青少年に関する意識調査報告書. [Online] http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/jouhou5/index.html（最終確認日：2011 年 2 月 5 日）

[8] 加納寛子（2009）即レス症候群の子どもたち―ケータイ・ネット指導の進め方．日本標準，東京

[9] ネット安全安心全国推進会議(2009) ちょっと待って、ケータイ！ 財団法人インターネット協会，東京

[10] 永井均（1986）〈私〉のメタフィジックス，勁草書房

[11] ジョージ・マイアソン(2004) ハイデガーとハバーマスと携帯電話．岩波書店，東京

[12] シェリー・タークル（1998）接続された心．早川書房

[13] 草野仁（2008）友だち幻想，筑摩書房

[14] 三森創（1998）プログラム駆動症候群，新曜社

[15] Kiesler, S., Siegel, J., & McGuire, T.W. (1984). Social psychological aspects of computer-mediated communication. *American Psychologist*, 39(10), 1123-1134.

[16] 川浦康至(1993) メディアコミュニケーション．現代のエスプリ，306，9-19，至文堂

[17] 富田英典（2002）ケータイ・コミュニケーションの特性．岡田朋之・松田美佐（編著）ケータイ学入門―メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会．有斐閣，東京